

東京大学白山構内の遺跡

小石川養生所復元建物建設に伴う
埋蔵文化財試掘調査報告書

2007.9

東京大学埋蔵文化財調査室

小石川養生所復元建物建設に伴う 埋蔵文化財試掘調査報告書

2007.9.10

埋蔵文化財調査室

調査日時: 平成19年9月3・4日

調査面積: 49.6㎡

調査担当者: 成瀬晃司

はじめに

医学部では、当学部の創設150周年記念事業の一環として、文京区白山の理学部附属植物園(通称、小石川植物園)内の小石川養生所井戸跡の南側に、小石川養生所建物の復元を計画した。当地は、縄文時代の小石川植物園内貝塚、江戸時代の「白山御殿」(館林藩江戸屋敷)、施薬園(小石川養生所)の存在が知られており、文京区によって「小石川植物園内貝塚・原町遺跡(遺跡番号:文京区No.21)」「小石川御薬園跡(遺跡番号:文京区No.81)」と命名され、周知の遺跡として登録されている場所で、該期の遺構・遺物の存在が予想された(第1図)。

そのため、医学部から照会を受けた埋蔵文化財調査室は、上記の日程で埋蔵文化財の遺存状況を確認するために、試掘調査を行った。

調査の概要

小石川養生所の建築は、おおむね長方形を呈する約150㎡の範囲で計画されている。当地の現況は、建設予定地の大半がツツジ園にかかっているため、それを避けて、建設範囲内を中心に逆「コ」の字状に3本のトレンチを設定した。トレンチは北側で北西から南東方向に伸びるトレンチ1、中央で北東から南西に伸びるトレンチ2、南側で北西から南東に伸びるトレンチ3とした(第2図)。以下に各々のトレンチでの調査結果を概略する。

トレンチ1(第3図)

北西から南東方向に伸びるトレンチで、2×7mで設定した。基本土層は表土が10cm、その下に煉瓦、ガラス瓶を含む現代の整地層が10~15cm続く。その整地層下はローム層になり、沖積層は存在しない。またローム層上面はすでにハードロームに達している。トレンチ中央部ではローム層上に砂粒を含む暗褐色土が敲き締められた硬化面が存在する。遺構はローム面上においてピット、土坑などが検出されたが、そのうちトレンチ東部より検出されたコの字状の遺構には二次的焼成を受けた砂岩質の破碎礫が数点含まれている。トレンチ北西部より検出された長方形の遺構は覆土中に炭化物、灰層を含み、最上面は敲き締められていた。両遺構ともに火に関する遺構と考えられる。コの字状遺構の西側でトレンチ壁面に架かって検出されたピットには1辺9cmの柱痕が存在し、その脇には支えとなる破碎礫が1点埋め込まれていた。

トレンチ2(第4図)

北東から南西方向に伸びるトレンチで、2×10mで設定した。基本土層はトレンチ1同様厚さ約10cmの表土があり、続いてローム粒を含む暗褐色土が10~15cmの厚さで堆積している。暗褐色土下はトレンチ1同様ハードロームである。トレンチ内からは土坑、ピットなど多数の遺構が検出された。

トレンチ中央部西壁際でピット 覆土上から1 辺約20cmの扁平川原石が1 点ほぼ水平に検出された。河原石下には根石はなく、その規模からも礎石かどうか疑わしい。

トレンチ3 (第5 図)

北西から南東方向に伸びるトレンチで、栽培植物との位置関係から1.6×7.5mで設定した。基本土層はトレンチ2と同様であったが、遺構確認面においてピット、土坑など検出された全ての遺構に切られる粘土塊を含むローム主体覆土の拡がり が検出された。地山との境、その覆土の拡がりを確認するために、トレンチ2の西壁側に沿って幅1 mのサブトレンチを設定し、本トレンチまで延長した。その拡張部を含めさらに再精査した結果、粘土混じりのローム土を覆土に持つ遺構は幅約1.5mを測る溝であることが確認された。主軸方向は設定したトレンチよりもやや南へ傾いている。

検出されたピットの中には柱の支えとした破砕礫が埋め込まれたもの、トレンチ方向とほぼ平行に約1 間間隔で並ぶものが存在した。

まとめ

上記の通り、小石川養生所復元建設予定地から、江戸時代の遺構、遺物が検出された。遺構面はローム層での1 面のみであったが、全てのトレンチにおいて、ソフトローム層の削平が確認され、江戸時代に大規模な造成工事が行われ一帯が平準化された結果が確認された。そしてトレンチ1にて検出された硬化面は、絵図面との比較から養生所台所の土間に該当する硬化面と推定される。

また、絵図面を念頭に置いて、現存する井戸との位置関係からトレンチを設定したが、絵図面の柱位置に該当する礎石、ピットは残念ながら検出されなかった。

遺物は各トレンチから各々数十点出土したが、その内訳は瓦、陶磁器片が半々くらいである。瓦は約半数が丸瓦、平瓦を含む本瓦、残りが棧瓦であった。家紋瓦が検出されなかったが、調査区周辺の履歴から、正徳3年に廃絶された白山御殿にて葺かれていた瓦の可能性が高いと考える。陶磁器類は19世紀代の製品が主体で、そのほとんどが陶器片で、磁器片に関しては全体で10点未満である。いずれも特に養生所と関連付けられるものはない。動物遺体では、第3トレンチより、カキ3点、サザエの蓋1点が出土したが、蛎殻葺きとの関連は不明である。

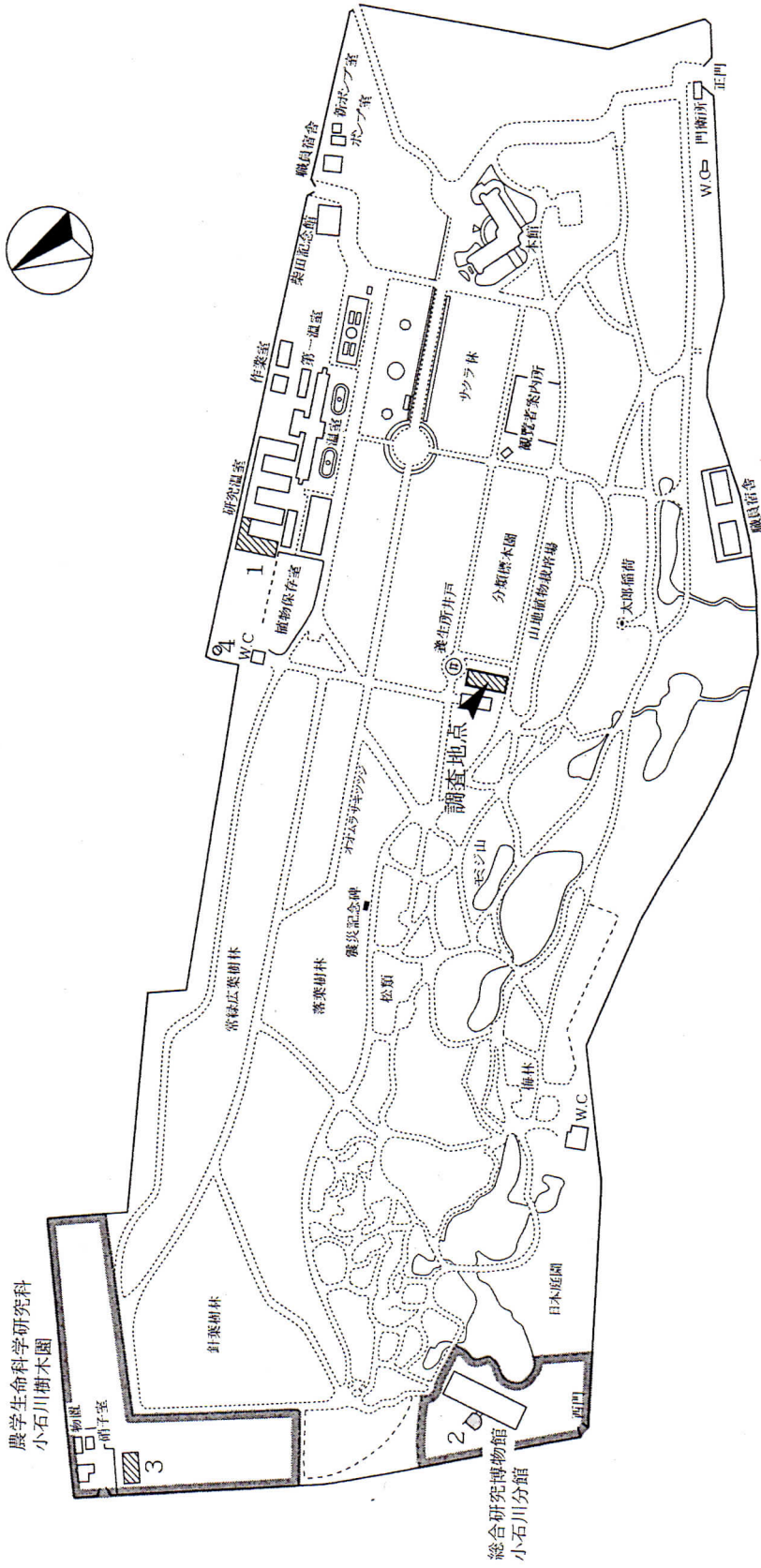
全体として養生所と関連付けられる遺構、遺物はトレンチ1の硬化面程度しか認められなかったが、近代以降一貫して植物園として利用されていた経緯から、遺構の遺存状況は良好で、また白山台の台地上に位置することから遺構確認面は現表下約20cmと非常に浅い状態で埋蔵されていることが判明した。

試掘調査から観た留意点

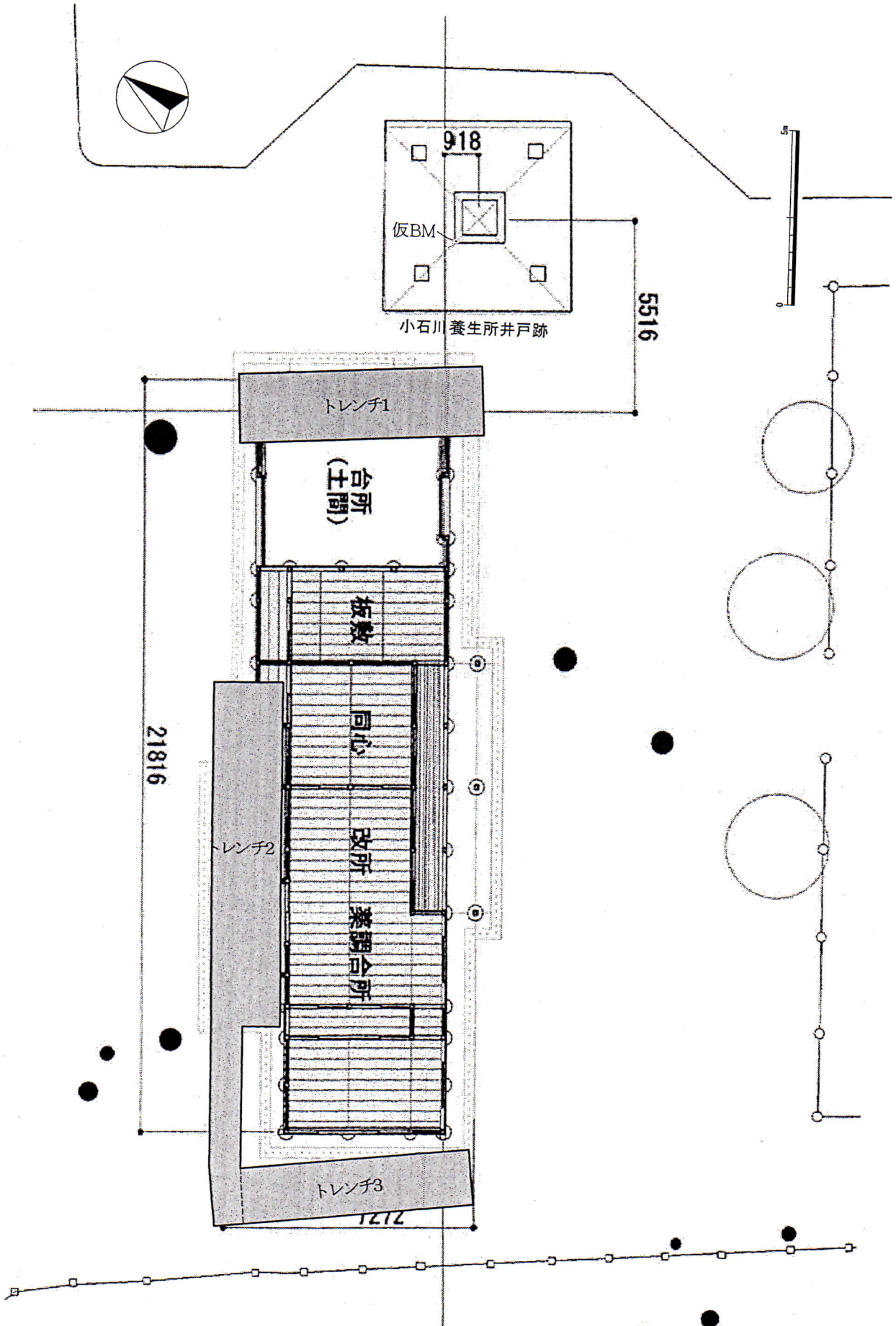
上記の試掘調査成果を踏まえ、建築に伴う基礎工事における留意点を以下に列挙する。

- ・ 今回の試掘調査における各トレンチは、本文中でも述べているとおり、現状の栽培植物、柵などを避けて設定した。そのため第2 図に示したように、トレンチ1 は建設予定区域の北端、トレンチ2 は西端にかろうじて架かる範囲に、トレンチ3 に関しては建設予定区域外にならざるを得なかった。よって、今回の調査によって確認された遺構遺存状況などの成果は、それを考慮し、建築工事にあたっては留意して行う必要がある。
- ・ 建設予定地点の現況は一見して平坦地に見て取れる。しかし第4 図のトレンチ2 セクション図から、現表は、傾斜変換点に近い南方から北方向に向けて緩やかに傾斜していることが確認された。遺構

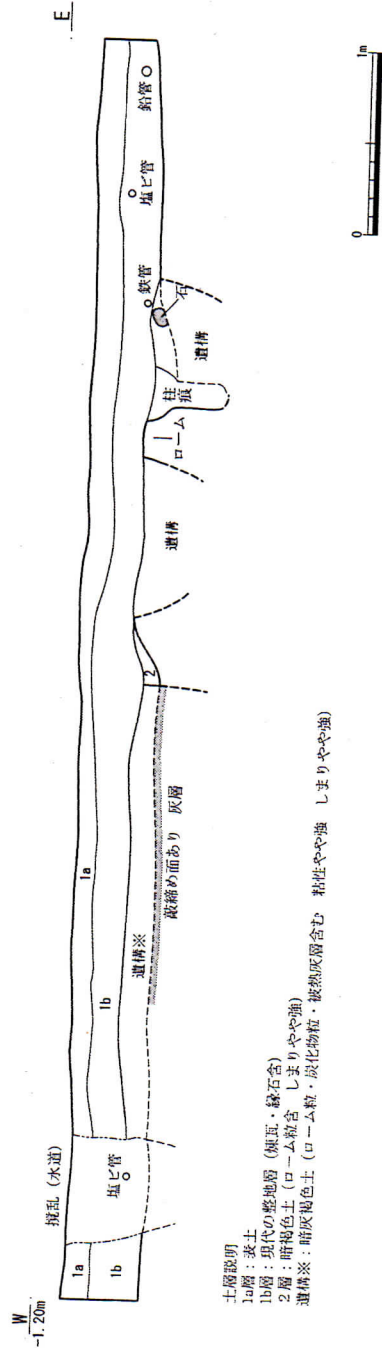
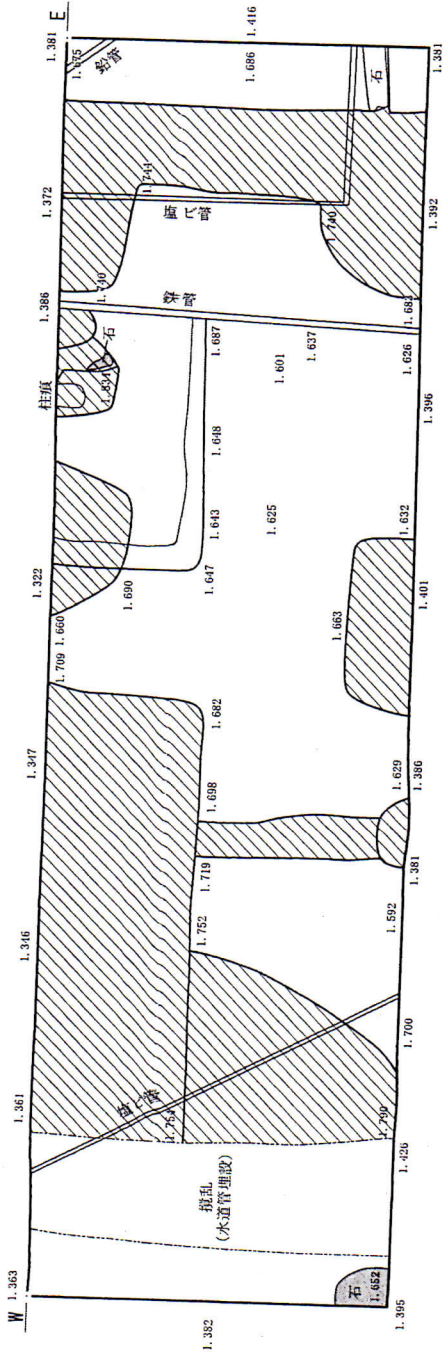
確認面であるローム層上面レベルも同様の結果となっている。トレンチ1(第3図)、3(第5図)に関しては現表、ローム層上面レベルともほぼ平坦である。この結果、最も標高の高い部分で、仮BM(ベンチマーク=0基準)とした既存井戸切石枠西角上レベル(第2図)より、-43cmで遺構面に達することが確認された。よって、計画建物の根切り基準とするGL(現表)レベル設定において仮BMを反映した設計を行い、遺構を損傷しないよう十分に留意して基礎工事における根切り深度の設定を行う必要がある。



第1図 調査地点の位置
 1.理学部附属植物園研究温室地点 2.総合研究博物館小石川分館地点 3.農学生命科学研究科小石川樹木園観覧室地点 4.原町遺跡第Ⅱ地点



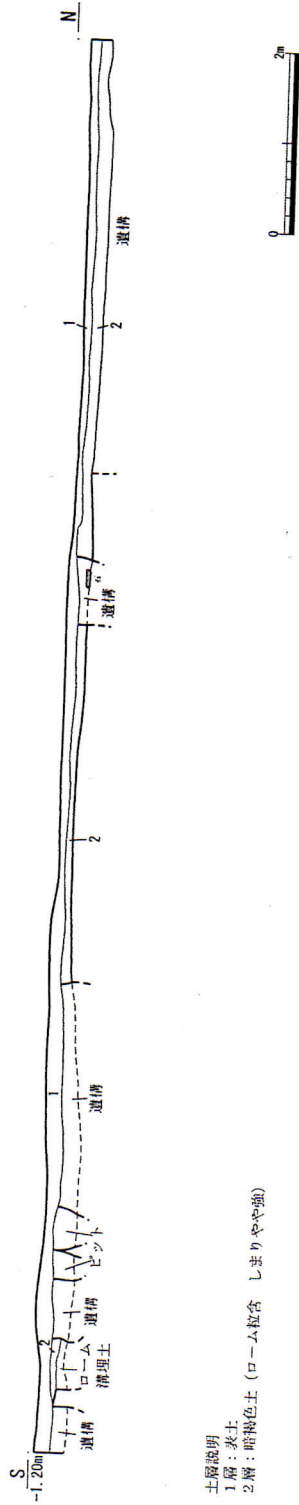
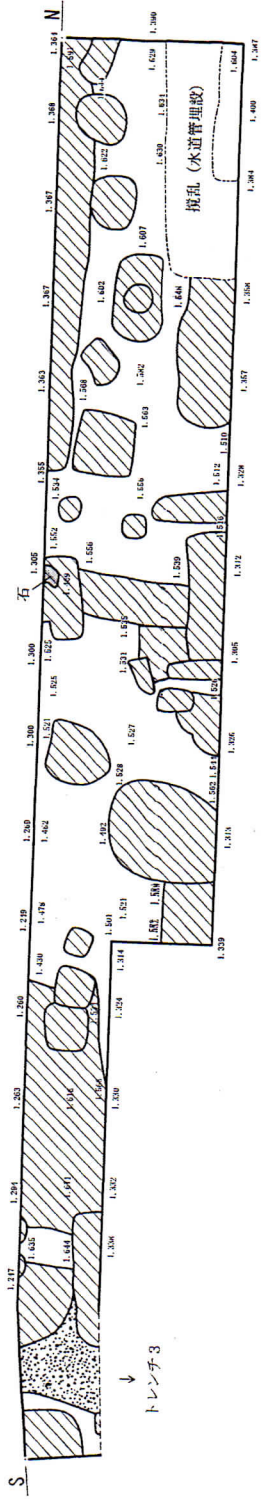
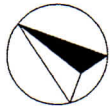
第2図 調査区全体図 S=1/150)



土層説明
 1a層：表土
 1b層：現代の整地層（掘乱・礎石含）
 2層：暗褐色土（ローム粒含）しまりやや強
 遺構※：暗灰褐色土（ローム粒・炭化物粒・炭熱灰層含む）粘性やや強 しまりやや強

第3図 トレンチ1 (S=1/40)

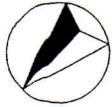
※レベル値は、眼高 仮BM+100.0 cm)からの比高差



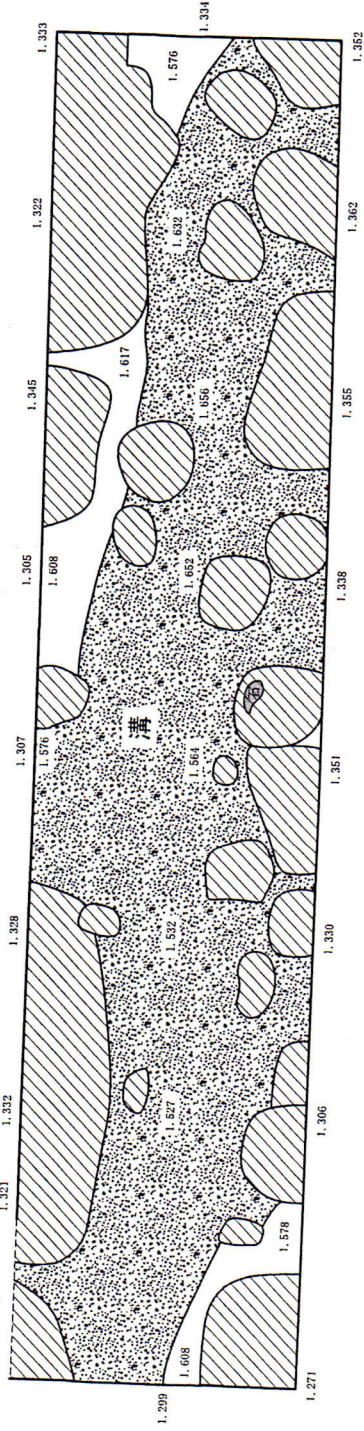
土層説明
 1層：表土
 2層：暗褐色土 (ローム粒含 しまりやや強)

第4図 トレンチ2 (S=1/80)

※レベル値は、眼高 仮BM+100.0cmとの比高差



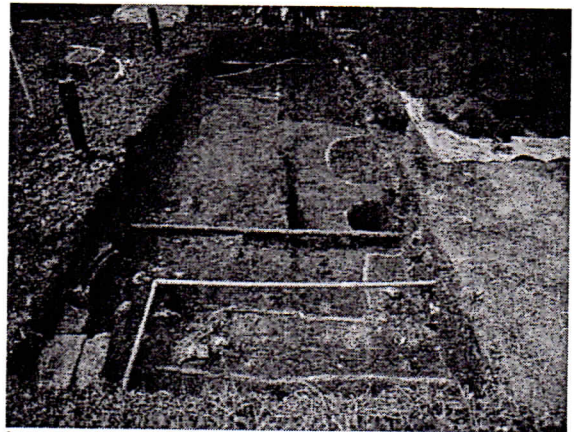
トレンチ2
↑



第5図 トレンチ3 (S=1/40)
※レベル値は、眼高 仮BM+100.0cm)との比高差



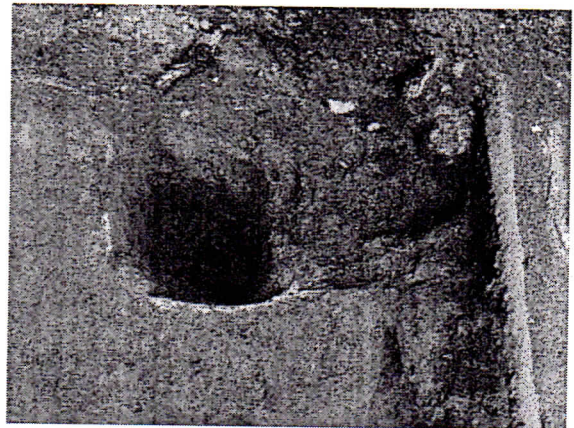
調査区 近景



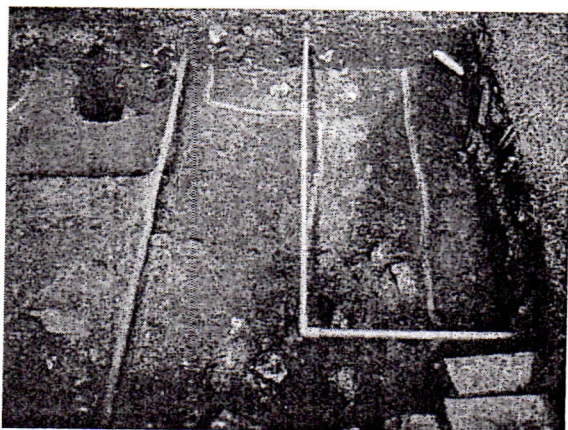
トレンチ1 全景



トレンチ1 炭化材・灰層を含む遺構



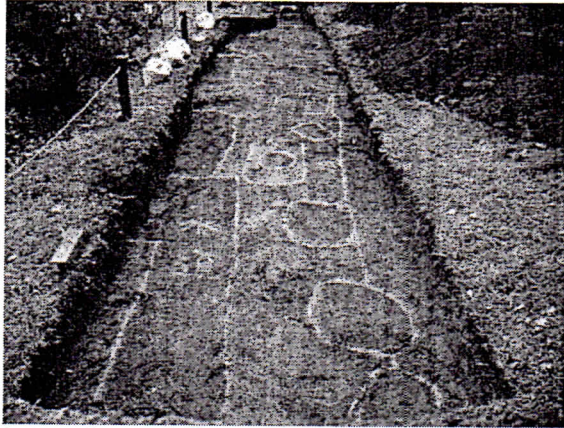
トレンチ1 破碎礫が詰められた柱穴



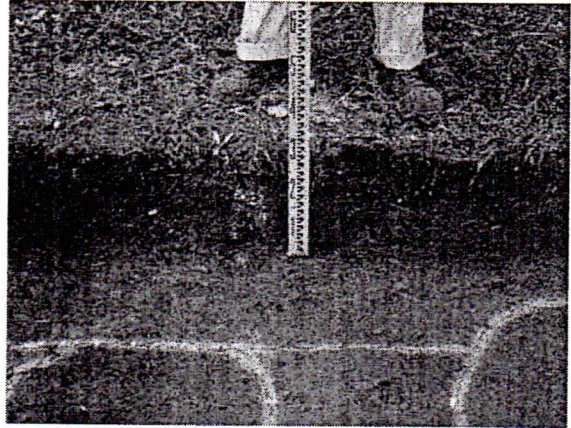
トレンチ1 被熱礫を伴う遺構



トレンチ1 硬化面(写真手前の暗褐色部分)



トレンチ2 全景



トレンチ2 掘削深度



トレンチ3 全景

粘土・ロームブロック主体覆土を有する溝が伸びる



トレンチ3 溝の覆土(白い斑が粘土塊)



トレンチ3 破砕礫を有する柱穴